

図画工作科での「主体的・対話的で深い学び」とは？

—— 構想力を育む教えに、しっかりと取り組む授業 ——

愛知教育大学 美術教育講座 富山 祥瑞

key words : 構想力, マネージメント力, 未来の教師

1. はじめに —— 「はい、作業開始」

図画工作・美術教育で大切な構想を練らせる(ヴィジョンづくり)行程, そのショートカットは, 授業の初期段階からの何気ない「はい、作業開始」の発声とともに, あながち少なくない光景ではないでしょうか。(註-1; 調査報告書)

下記は10年前, 各地の教員採用試験で設問になった『学習指導要領/図画工作』(2008年)の一文です。

表現及び①の活動を通じて, ②を働かせながら, つくりだす③を味わうようにするとともに, 造形的な創造活動の基礎的な能力を培い, 豊かな情操を養う。

答えは, 言わずもがな「① 観賞」「② 感性」「③ 喜び」です。当たり前ですが『学習指導要領』は, 指導者である教師に向けた指導の指針(文字通り「指導の」「要領」), 子ども向けのメッセージではありません。教師として「どういう指導をすれば, 子どもの『感性』が働くだらう」「どうやったら『つくりたいと思える』作品をヴィジョン化してあげられるだろうか」「どのように指導したら作品づくりが嬉しくなるだろうか」等, どう導くか! が教師の腕の見せどころとなります。

でも, どうでしょう —— 直接的に「感性で」「思ったことを表現してごらん」「自分らしさを表してごらん」と語られ, 作品ができあがるはずもなく, 子どもが悩むシーンが見られるのではないのでしょうか。

自分が考えたものが形になるのは, 教師のマネージメント力で生まれ, この支援こそが子どもの構想力を磨く図画工作・美術の「教科」である存在意義だと考えます。

2. アクティブ・ラーニング=教師のマネージメント

昨年2017年に公示された新しい学習指導要領では「主体的な学び, 対話的な学び, 深い学び」, いわゆるアクティブ・ラーニングの考え方が注目を集めました。

教師の観点でのアクティブ・ラーニングは, 前述と同様に教師が教えることにじっくりと取り組み「どうやって, 子ども『主体的学び』を導き出すか」にかかっています。

筆者は, 図画工作教育では, クウキ感として, アクティブ・

ラーニングの「主体的な学び」の部分が一人歩きしてしまう危惧を抱いています。世間一般の認識として, 図画工作・美術教育の「個性」「センス」「自由」が大切とする曲解に対しての舵きりも, 教員養成系大学のミッションと捉えています。

元 文部科学省視学官の遠藤友麗(ともよし)氏は, 図画工作・美術教科を, 表現・観賞活動を通じて, 感性を豊かにし, 構想する能力や表現能力を伸ばす, とする指針を出された方ですが, 既に2001年の時点で美術教育の状況につぎのような警鐘を鳴らしています。美術教科の在り方は「放任的な自由表現」ではないとも断じています。

自由や創造という美名の下に放任的な自由表現や流行としての奇をてらった目新しさに流れすぎ基礎的な技能等の定着をないがしろにしてきた結果, 基礎も身に付かないで苦手意識をもつ多くの人たちを輩出してしまった結果であることをわれわれ美術教師は謙虚に反省しなければならぬ。表現や創造とは, 基となる言語表現の基礎的な能力や構成の仕方など, 一定の基礎がなければできないことは多くの人が経験済みである。(註-2; 当該は中学美術)

図画工作・美術といった思考鍛練の教科こそ, 授業の工夫・改善による進展, そして研究が必要な分野です。とくに義務教育の段階で「主体的学び」を表層的に捉えての放任的な自由表現の作業時間の提供 —— 「はい、作業開始」は, もはやアクティブ・ラーニングとは呼べないでしょう。

3. 教育大学からの発信

次頁は, 教員養成大学のミッションとして, 未来の教師である大学生に, 図画工作・美術教育の見過ごされてきた事項を再認識してもらいたいと願って記した板書です。この4年ほど分からセレクト(現在73話)しました。

未来の教育現場に持って行って, 振り返って欲しいです。

註-1) 富山祥瑞「教科としての「図画工作・美術」が抱える課題 —— 教育学部・大学生の回想による調査報告 ——」『愛知教育大学研究報告 第62輯 教育科学編』2013, pp.207-214

註-2) 遠藤友麗『新しい時代の学力づくり授業づくり 資質・能力を育てる 中学校美術科編「A 表現」』明治図書, 2001, p.6

